

概念は、「日本仏教」という概念の成立を前提としてそれとの接触、共存の産物として現れてきた近代概念である。一九〇〇年代から一九一〇年代までは「日本仏教」に対する地理的な意味での「朝鮮仏教」、「朝鮮にある仏教」という意味合いで使われはじめた。しかし一九一〇年代に入ると、朝鮮の人々による自己言及としての「朝鮮仏教」が明確に認識され、一九二〇年代には植民地朝鮮と「内地」でほぼ定着する。「朝鮮仏教」の「改革」「維新」「近代化」などが強く意識され、「日本仏教」を相対化しつつ朝鮮民族の仏教というナショナル・アイデンティティとの接続が行われる。そして一九三〇年代に入ると、「朝鮮仏教」の独自性や獨創性を明確に主張する言説が形成されるとともに通教思想を媒介とした統一体としての「朝鮮仏教」構想が進行する。また、戦争期になると、許永鎬にみるように、「朝鮮仏教」という概念が「帝国」「日本」「日本仏教」という諸概念をめぐる普遍と特殊の関係性のなかで認識されざるをえなくなる。結局「朝鮮仏教」は特殊としての「日本仏教」とともに普遍的な「帝国仏教」のようなものへの志向性を強く帯びるものとなる。

従来、当該期を取り扱う韓国の先行研究においては、日本の帝国主義に協力した植民地朝鮮仏教界の親日性が「親日仏教」という概念で批判される一方、韓国仏教の近代化に貢献した様々な努力や苦悩は評価すべく、それを「民族仏教」という概念で説明する。要す

るに、「親日」と「民族」といった二項対立的な一國史の分析枠組みによって「朝鮮仏教」の読み方は錯綜している。

本報告では、「帝国仏教」を構想していた許永鎬の「朝鮮仏教」認識を事例として検討することで、「親日」と「民族」で裁断されている近代「朝鮮仏教」を新たに照明する。

◆パネルのねらい

パネル1

朝鮮戦争からの復興と都市建築

—平壤・咸興の事例から

朝鮮戦争によって北朝鮮の多くの都市は甚大な被害を受けた。そしてその復興には旧東側諸国の強い関与があったことが知られている。しかしその具体的な再建プロセスは、これまでほとんど明らかにされていない。

都市復興のための建設事業は、いわば北朝鮮という新しい国家の建設事業でもあった。そしてグローバルな国際関係の展開のなかに位置づけるならば、この建設事業は、冷戦の熱戦化にもなつて進んだ第二次世界大戦の戦後処理構想の見直し、東側陣営内の秩序再編の一面ととらえることもできる。

本パネルでは、谷川竜一が趣旨説明を行った上で、平壤・咸興の概要とそこに建った建築の具体的な姿やデザイン、都市景観を考察し、続いて富田英夫が旧東ドイツの建築家らによる咸興復興計画の建築・都市的分析を行う。最後に、川喜田敦子がドイツに残る公文

書や報告書を分析し、建設の背景となる国際関係にも目配りしつつ、パネル全体として北朝鮮都市・建築史の理解を深めることを目指したい。

【報告者・タイトル】

谷川竜一（京都大学助教）

「平壤復興と創造された景観」

富田英夫（九州産業大学講師）

「咸興復興における東ドイツ建築家K・ピュシエルの活動」

川喜田敦子（中央大学准教授）

「北朝鮮復興支援と国際関係」

パネル2

竹島／独島領有権問題の現代史的課題

二〇一二年八月一〇日韓国の李明博は、大統領として史上初の独島上陸を敢行した。それに加えて各種の歴史問題での葛藤は深刻で、いま日韓関係はかつてないほど悪化している。こうしたもとで、両国の学界における竹島／独島領有権研究は新たな展開をみせている。日本側では、とくに池内敏『竹島問題とは何か』（二〇一〇）が、国内で高い評価を受ける。一方、韓国では複数の書評が、その見解の核心をなす「無主地先占論」に全面的に反駁している。他方では、自費出版の著作として、竹内猛『竹島／独島問題「固有の領土」論の歴史的検討（前編）』（二〇一〇）および『同上（後編）』（二〇一〇）が注目される。本書は一

般向けの通史的概説書として、すでに二〇一三年、前編が韓国語に翻訳され公刊されている。なお、島根県が設置した「竹島問題研究会」は、第二期の中間報告『竹島問題一〇〇問一〇〇答』（二〇一四）を初めて公刊し、世論喚起に躍起となっている。

こうした研究の現段階をふまえて、本パネルでは、前記著作の著者である池内敏による解放／敗戦後の研究史を整理した報告、また日韓会談文書の全面公開に取り組んできた吉澤文寿による近年の公開文書をふまえた日韓国交正常化交渉関連の報告を準備する。

【報告者、タイトル】

池内敏（名古屋大学）

「竹島／独島論争史小史」

吉澤文寿（新潟国際情報大学）

「日韓国交正常化交渉における竹島／独島論議」

コメント

坂本悠一（立命館大学）

パネル3

植民地朝鮮とスポーツ

—一九三〇年代を中心に—

一九三六年のベルリンオリンピックで孫基禎が金メダルを獲得したことに代表されるように、植民地朝鮮では、日本ほどではないにせよ、スポーツ活動が盛んに行われていた。例えば、日本人学校、朝鮮人学校を問わず、

◆関東部会例会報告

◇二〇一四年一月例会

（一月二五日、東京大学弥生キャンパス）

【報告】

満洲国陸軍軍官学校第一期生の朝鮮人と光明中学校

飯倉 江里衣

満洲国軍とは、「満洲事変」を起こした関東軍が中国の旧東北軍閥軍の一部を改編し、一九三二年の「満洲国」の建国と共に創設した軍隊である。一九四五年の解体まで、兵士の大多数を中国人が占めたが、そのほか、モンゴル人、朝鮮人、白系ロシア人などの多様な民族によって構成された。満洲国軍では、関東軍の日本人が軍事顧問を担当し、指揮官の養成などを行った。指揮官には「日系軍官」と「満系軍官」が約半数ずつ存在し、彼らは奉天の中央陸軍訓練処（以下、中訓）や新京の陸軍軍官学校（以下、軍校）などの将校養成機関内で別々に教育を受けた。「日系軍官」とは、日本の陸軍士官学校受験者の中から選ばれた日本人のことで、「満系軍官」とは、「満洲」（以下、満洲）各地で中訓や軍校を受験した日本人以外を指し（ただし、モンゴル人は「蒙系」）、朝鮮人は主に後者に含められた。現在、中訓および軍校を卒業した朝鮮人はそれぞれ、三九、四八名と確認できるが、満系軍官の圧倒的多数は中国人であり、朝鮮人の数はその全体からするとわずかである。本報告では、日本の陸軍士官学校を模範に